

薬王菩薩

秋野 成道

と思っていた。そうして四年が経過した。

この時の太守は、蘇則であったか蘇梁であったかは定かでないが、蘇を姓とした太守であった。ある時、蘇が廁に小用に立った時である。中庭を見ると、他の小間使いたちは軒下の階段に坐って話をしたり居眠りをしていのに、一人の若者だけが黙々と庭の掃除をしていた。しかも、他の者が仕事をせぬのを苦にもしていない様子で、何か口ずさんでいた。よくよく見ると、その口の動きから、

「吾れ知ること有らんや、知ること無きなり。鄙夫あり、来りて我に問う、空空叙たり。我その両端を叩いて喝くす」

と論語を誦しているようなのであった。

「雑夫が四書を学ぶとはおもしろい」

蘇太守はそう思つて、廁から中庭に通じる回廊を渡つた。

太守の姿を見ると、これまで怠けていた小間使いたちは一斉に立ち上がつて、掃除やら草むしりをするやら、忙しそうな振りをしだした。太守が立ち止まると皆跪いた。中庭で掃除をしていた輔も跪いた。太守は輔を指さすと、

西晋の新安郡、現在の四川省成都に、姓は涼名は輔、字は漢儒という者がいた。幼少より物覚えが良く、七歳にして四書をそらんじたと言われる神童である。ところが両親が霍乱、今でいうコレラであつけなく死んでしまつた。輔にはこれといつて頼る身寄りがなかつたが、近所の者は輔を憐れんで、掃除や雑用、使い走りを見せて多少の手間賃を与えた。これでなんとか飢えをしのぐことができた。

数えで十六になつた年、新安郡の役所で雑役の仕事に就くことができた。嫌な雑用を言いつけられても不平一つ言わずに仕事をした。着る物も同僚が着古した物を貰つた。食事も朝と晩の二回と決めていた。皆が昼餉をとっている間は、裏庭に出てかつて覚えた四書を口ずさんで空腹を紛らわせた。

「一日に二度も飯が食えればそれでいい。どんな仕事でも有難い」

「お前、ちよつとこつちに來い」

と言つた。

輔は何か自分に落ち度があつたのかもしれないと、内心びくびくして太守の前に進んで這いつくばつた。

「私めに何か至らぬ点がございましたでしょうか」

「廁からお前を見ておつた。お前の口ぶりから論語を暗唱していたように見えたが、その通りか」

「左様でございます」

「何故論語を読むのか、その訳を聞きたい」

「両親を亡くしてからは、貧しいためにいくらかあつた書もみな金に換えざるを得ませんでした。子供の頃より親しんだ書ですが、背に腹はかえられません。暗記をして売り払いました。それからは、生涯忘れぬように、四書を毎日繰り返し暗唱いたしております」

「それでは、孟子の四端を知つておろう」

すると輔は淀みなく、

「人皆人に忍びざるの心有り。先王人に忍びざるの心有り、斯（ここ）に人に忍びざるの政（まつりごと）有り。人に忍びざるの心を以て、人に忍びざるの政を行はば、天下を治むること、之を掌上（めくら）に運（めぐ）らすべし」

「もうよし、わかつた」

太守は輔を遮ると、意外な事を言うのだった。

「お前は明日からわしの執事となれ」

そう言つてその場を立ち去つた。

他の雑夫の羨むこと限りなかつた。

翌日から太守のそばで身の回りの雑用をすることになった。ツギのあたつたぼろ布のような衣服は執事にふさわしくないので、新しい衣服が与えられた。食事も執事の控室で供されるようになった。これまで日に二度の食事しかとれなかつたが、執事になってからは三度の食事を得ることができた。これまでの粗末な食事から、肉や野菜をふんだんに使つた料理に変わった。

終日太守のそばで身の回りの雑用をするので、住まひも役所内に与えられた。狭いながらも清潔な部屋であつた。輔は衣食住に不自由することがなくなつた。

輔はまめまめしく太守の雑用を勤めた。手すきの時間があると、書庫にある書物を読むようになった。これまで四書しか知らなかつたが、ここで仏教經典を学ぶことができた。特に竺法護の訳出した『正法華經』に強い関心を示した。以後は菜食を行い、經典を諷誦するようになった。そして、

「民のために何ができるだろうか」

と考えるようになった。自らが貧しい出であつた。

だから役所の仕事が休みの日は、領内を廻り、手助けが必要な百姓や貧乏人を助けるようになった。

半年が過ぎた。蘇太守は輔の勤勉な様子を見て、試みに太守宛の書簡の返書を代筆させてみた。太守が返書の意を伝え、その意を汲んで文章を作成するのである。太守は輔の能筆な書と内容に満足した。以後は返信の意図を伝えるだけで、太守が目を通すことなく輔の作成した書簡が返送された。

また、領内の視察に同行させることもあった。すると輔の姿を見て拝む百姓らがいた。太守が、

「何故、百姓たちは輔を見て拝むのだ」

と供の者にその訳を質した。

「涼殿は困った領民の手助けをしているそうでございます」

その後、輔は執事から文林郎に昇格した。実直に職務をこなし、太守の信任はますます厚くなった。太守からさまざまなことを問われ、その方策を太守に進言した。

こうして数年が過ぎた。輔は既に太守にとってなくてはならない者となっていた。

咸和二年の夏ことである。新安郡は米の採れる豊かな土地であった。しかしこの年、稲が成長する時期に、雨はまったく降らなかつた。三日、五日と続き、これが半月も続いた。

豊かな水量を誇った清白江も、ところどころにわずかな水たまりを残し、川底が露呈し干乾びていた。灌漑のための陂塘はちどうと呼ばれる溜池も空になっていた。稲の育たぬ田は、かなたまでゆらゆらと霞んで見えた。誰もいない田園はひっそりと静まりかえっていた。このままでは大飢饉はまぬがれそうもなかつた。

慣例により雨乞いの儀式が執り行われた。呪術者を裸にして縛りあげ、陽にさらすのである。

数時間、呪者は口の中で何かを唱えていた。流れ出る汗で目を開けることもできなくなっていた。そのうち、唱える声が聞こえなくなつた。静まりかえつた中庭には呪者の激しい息づかいしか聞こえなかつた。一粒の雨も天からは落ちてこなかつた。

数人の呪術者が雨乞いを行ったが、一向に効き目がなかつた。民の愁いを救うため、ついには太守自らが裸になって雨乞いをした。太守の肌が赤く陽に焼けて、水ぶくれのようになつた。口元を歪めて痛みを耐えていた。しかし、やはり雨の恵はなかつた。

うなだれる太守の前に進み、輔は次のように申し出た。

「太守のため、民のために私めも雨乞いを行いとうございます。輔はここに誓いを立てます。明日の日没までに雨が降ることなければ、身を捨てて焼身供養いたします」

太守は無言でいた。輔はそれを了承と解した。

「ありがたきこと。誓いのごとく、雨の恵みがない時はこの身を天に捧げます」

そう言って、裏庭にある薪を積み上げ、万一の場合の準備をした。

早朝、輔は裸になって同胞に体を縛りつけてもらった。

陽が昇り始めると、中庭に座り法華経を誦し始めた。陽が中天に差し掛かっても、口を閉じることにはなかった。刻一刻と過ぎ、輔の肌も太守と同じように陽に焼けただれ始めた。しかし、陽が山の端に入る頃になっても雨が降る気配はなかった。

辺りが暗くなると、輔は太守の前に進み出た。

「いたらぬ我が身であります、最後の望みをかけてこの身を供養いたします」

中庭に積み上げられた薪の、体を一つ入れるに足だけの龕がんに入り、火を付けることを乞うた。中庭には土地の者が挙こぞって集まっていた。

下役が火を付けると、輔は法華経薬王菩薩本事品を誦し始めた。火が薪を覆いつくそうとした時である。天から一粒、そして一粒と雨が降ってきた。それが糸を引くように次から次へと降り注ぎ始めた。

太守は、積み上げられた薪の中から輔を救い出すよう命じた。しかし、火はすでに薪全体を覆い、雨の中でも轟々と燃え上がっているのである。輔の経典を誦す声はまだ聞こえてくるのに、誰も手を出すことができなかった。ただ燃え盛る薪を見つめているばかりであった。しばらくすると輔の声も聞こえなくなった。

その時、天から星のようなものが薪の中に落ちた。すると薪の中から天に向かって何かが昇って行った。

薪が燃え尽きるのを待つて中を探すと、そこには何も残っていないかった。辺りは既に真っ暗になっていた。雨は間断なく降り注いでいたが、誰もここを立ち去ろうとはしなかった。

この雨で全郡がうるおった。輔は薬王菩薩の化身として世にたたえられた。